

1. 団体名：NPO法人 海辺つくり研究会（夢ワカメ・ワークショップ実行委員会）
2. 提案名：第10回 夢ワカメワークショップー横浜港におけるワカメの育成による
海域浄化ー

3. 助成を受けて行った活動の時期および内容：

時期：平成22年9月～平成23年2月

目的：横浜港海域において、海水の水質を浄化することによって、港湾および海辺に対するイメージアップを図ることは、横浜港の活性化に大きく寄与するものと考えられる。

海水の浄化方法はさまざまなものがあるが、ユニークな手法として、海藻類の利用がある。海藻類は、生長に伴って海水中の窒素やリンを吸収し、海水の富栄養化の防止に効果のあることが知られている。とくにワカメは生長が早いいため、それだけ海水の浄化効果が高いことや、他の水産有用生物の滋養効果があることが言われており、各県においても海の森づくり事業などが積極的に推進されている。一方で、広く市県民にその効果や有用性を理解されるまでには至っていないことがほとんどである。

これまで、横浜港において、ワカメを生育し、水質浄化効果の検証を行い、その効果が検証された。事業は子どもたちを含む一般市民の参加により実施され、環境学習面、市民参加の東京湾の浄化、一般市民の環境意識の啓発に効果があることが解った。今年度は、さらに参加者を募り、一層の理解を得ることや、海域の浄化・生物の滋養を促進させること、以上を目的として実施した。

内容：（１）市民団体の連携

事業を実施するにあたり、市民団体で実行委員会を形成し、事業実施にあたった。参加した市民団体は、（海辺つくり研究会、海をつくる会、水辺を記録する会、カナカナ生物調査会、かわさき・海の市民会議、海の森づくり推進協会、横浜シーフレンズ、磯遊び研究会、よこはま水辺環境研究会、環境技術交流会、金沢八景-東京湾アヲ場再生会議、とどろき水辺の楽校、ともに浜をつくる会、みなとサポート、よここネット、盤州里海の会、地球市民a c t）の17団体である。事務局および責任には海辺つくり研究会があたり、実行委員長は海をつくる会の坂本昭夫が担うこととなった。共催として、国土交通省関東地方整備局港湾空港部に入っただき、許認可申請等での協力を頂いた。また助成協賛は、三井物産環境基金、一般社団法人みなとみらい21から受け実施することができた。後援を横浜市港湾局、神奈川県水産技術センターから受けた。

（２）許認可申請

事業実施にあたっては、海上保安部への作業許可申請、港湾管理者である横浜市港湾局への水域占用許可申請、神奈川県水産課への漁具敷設許可申請を行った。

（３）ワカメ生育ロープ設置（11月27日実施）

設置前日に、実験実施場所に仕掛けを下ろした後、ワカメを親縄毎垂下させる。親縄に結束した張り縄を岸壁から垂下させ、それぞれの張り縄の長さを調整して展開さ

せた。

- ・ ワカメを始めとする海藻の役割の学習を行った。(神奈川県水産技術センターの工藤主任研究員から説明) 併せて、地球市民 act から海外へのワカメの寄附を呼び掛けた。
- ・ マイワカメとするため、プラバンで名札を作成した。
- ・ ワカメの種糸および名札となるプラバンを各自取り付けた。

(4) 実施内容の広報

実施している内容をパネルにして会場に設置した。

(5) 生育ワカメの観察、生育管理(12月23日および1月10日に実施)

栈橋からの張り縄を延ばしつつ、岸壁からの張り縄をたぐり寄せ、親縄を岸壁上に引き揚げて、育成筏の保守を行い、海藻の生育状態を観察する。

この様子については、メール通信「ワカメからのメリークリスマス」、「ワカメからの謹賀新年」として参加者に配信した。

(6) 生育ワカメの撤去回収(2月6日実施)

護岸に係留している張り縄を外し、岸壁に係留している張り縄をたぐり寄せ、親縄をはじめとする全施設を岸壁上に引き揚げた。

- ・ 個別にワカメの重量を計測し、全員の合計重量から、窒素およびリンの回収量を計算し、海をどれくらいきれいにしたかを全員で確認した。結果、回収総重量 **615.6kg**、乾燥重量 **44.32kg**、総炭素量 **11.26kg**、総窒素量 **1.41kg**、総リン量 **0.43kg** となり、大人4人が1年間に生活から排出する量を回収したことになった。
- ・ 併せてワカメの味噌汁大会および釜石産ワカメによるワカメの調理品の試食会および地球市民 act からタイラーメンの試食を行った。
- ・ アンケート調査も実施し、アンケート提出者には岩手県漁連のから塩蔵ワカメの試供品をプレゼントした。

4. エリアマネジメントにおける効果

これまで海際の町でありながら海とのふれあいは、眺めるだけにとどまっていることがほとんどである。これを地域の財産でもあり故郷ともなる地域の海域環境を自ら改善させようとする行動は、地域に対する愛着や誇りを増し、地域のコミュニティーを発展的に形成していく上で、効果が期待できるものと思われる。

5. 今後の活動展望

これまでも、マスコミ等を通じ様々な媒体で報道されてきた。参加者の口コミなどからの情報伝達も多い。東京湾の市民の手による浄化が一般化されるまでは、継続させるつもりであり、また参加者からの継続要望も高い。一方、地域住民や企業等からの参加は徐々に増えつつあるものの、まだまだ少ない。参加者の枠が決まっていることから、急激に増やすことも難しいが、地域内からの参加者が増加できるよう検討していきたい。